九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

水滸伝解釈の問題

目加田，誠

https://doi.org/10.15017/2332898

出版情報：文學研究. 50, pp.1-3, 1954-12-25. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

水滸伝解釈の問題

目加田誠

中国旧小説の中で最も代表的な作品である水滸伝が、従来批評家からどういう観方をされて来てゐたか、そしてそれが今日、どういう風に扱はれてゐるかを述べて、中国に於ける旧文学の取扱ひ、所謂文学遺産継承の問題について、一つの具体的な解答を示して見度いと思う。

一九五二年十月、人民文学出版社から七十一回本水滸伝（金聖嘆本を底本に用ひつゝ、その批語を除去し、七十一回盧俊義が悪夢の一段を削り、そのほか金聖嘆が彼の好みで勝手に書き改めた箇所をところ〴〵百二十回本のもとの形に復し、又今日読んで面白からぬ点、たとへば豪傑が人の肉を喫べるところなどに幾分手心を加へて）が先づ出版された。巻頭に編輯部の名による水滸伝の版本、作者に関する文章があり、その八月の日附になつてゐる。

この出版と並行して、その九月に、蘇北文聯は、水滸の作者とされる施耐庵の故郷、江蘇省興化県に人を派遣してその遺蹟調査を行つた。その報告が、この調査のきつかけとなつたところの劉冬・黄清江という二人の研究家の「施耐庵と水滸伝」という文章と共に、一九五二、一一、文芸報（二十一号）に掲載された。已にその前から水滸伝は新らしく注意されはじめ、一九五〇、文芸報第二巻第二期に茅盾は「水滸の人物と結構を談ず」を書き、四九―五〇年にかけて黄裳は水滸劇に関する論説を文匯報に書き（之は後に談水滸戯及其他として一九五二年に出版され、五三年改版されて平明出版社より刊行されたものゝ中に収められてゐる。）又王朝聞は「水滸中の一個両面性の典型何九叔」（この論文の発表日附不明。同氏の新芸術論集中に収められる）を書いたが、この人民文学社の水滸伝出版につゞいて、一九五三年文芸報第三号には同じく王朝聞が水滸の細部、具体描写につゐて論じ、同六月雑誌人民文学に、聶紺弩が、「水滸はいかにして書かれたか」というすぐれた論文を発表した。同九月には、冥読輔導叢刊第四本として、于在春主編、江樹峯編写で「水滸の好き処」が刊行されてゐる。この最後のものは簡単乍ら要を得て、水滸伝が北宋末年の農民起義を主題としてゐること、語言は全く大衆日用語を使

用してゐること、人物描写は遠より近へ、粗より細へと向つて進める巧みな方法が用ひられてゐること、環境描写が人物や事件を見事に生かしてゐること。（この描写については茅盾の説を引用）。但し水滸には思想のおくれた点があること（例へばその中の婦人観。又例の吃人肉の問題等）等を論じてゐるのである。

一九五三年十一月になると、中国作家協会で開いてゐる文学講習所で、水滸伝の学習が行はれ、又中央電影局の学習班でも水滸に関する討論が行はれた。

作家協会の講習会では、先づ鄭振鐸が、なぜ、又いかに古典文学を学ぶかということを講演し、必ず唯物史観に立つて社会の本質、階級関係を把握して、然る後始めてその作家の観方、立場に対して、正確な解釈が出来るのだという説明をし、ついで聶紺弩が四回に亘つて水滸の主題、時代背景、創作方法、作者の観点と立場の問題について講演し、その後小グループに分けて講習員が水滸を読み、討論し、更に大きいグループで二日間討論し、その結束として、馮雪峯が詳しい報告を行つた。（文芸報一九五四、第三号、我們学習了水滸。――略工。による）。この馮雪峯の「水滸伝に関する幾個の問題についての回答」という論文が、文芸報一九五四年3、5、6、9、11号に亘つて、十四項目に分けて掲載された。又聶紺弩は更に人民文学一九五四年五月号に「水滸の思想と芸術性は漸次向上せるものなることを論ず」という論文を発表した。

人民文学出版社の七十一回本出版についで、一九五三年十二月には、作家出版社から又水滸を出版。之は前者と同じく七十一回本で文中にやはり多少手を加へてある。今年一九五四年三月になつて人民文学社は、水滸の後半即ち宋江ら招安以後の物語りを加へた百二十回本を出版して水滸全伝と題したのである。（一九五三、一一、の鄭振鐸の序あり）。

最近は又一九五四年七月に、中国古典文学研究叢刊の中で、何心という人の水滸研究――之は水滸の故事来源、作者、版本、地理、編年、社会、風俗等に関する考証――が出版された。八月には雑誌「文芸学習」に、張真という人が「水滸を読む態度を語る」と題して、水滸を読み、且つ批評する者は、之ら革命英雄たちに対して先づ深い愛情を以て臨む可く、しかる後に歴史条件に限られた作中の人物の欠点をも正しく評価出来ることなどと論じてゐる。

まだこのほかに水滸に関する論文で見落したものがきつとあるだらう。先づこういつた風で、この二三年来水滸伝ばやりといつていゝが、之らのものによつて、現代中国に於ける水滸伝の取扱ひ方がうかゞへる。そしてそれによつて、従来の解釈とどういう点が、どう違ふかを比べて見よう。

水滸伝の作者は羅貫中といひ、施耐庵といひ、確かなことはわからない。（前述の調査報告によれば興化県続志に載せた明の王道生の施耐庵墓志及同書文苑中の施耐庵の伝記によると、施は元の至順の進士、明の洪武の初めに死んだ人で、江湖豪客伝即ち水滸伝を書いた。門人羅貫中の力を借りたところが多かつた、ということになるらしい。がこの墓志はやゝ疑はしい点があるやうで――何心、水滸研究――又上述の調査の結果多少新資料を得たがそれも尚研究の余地はあるらしい）又水滸伝の版本はいろ〳〵

あり、それに関する問題も多いが、先づ明の嘉靖年間郭武定が刊行したというもの（周亮工書影）が、（この本今存するや否やを知らず、人民文学社刊水滸全伝の序に鄭振鐸が、忠義水滸伝二十巻一百回の中一部残存といつてゐるが、その誤字が多いらしい点からして、一寸疑問がある、と何心は云つてゐる。）非常に大切なもので、この郭氏の百回本を使つて、始めて水滸の批評をしたのが有名な李卓吾であつた。

李卓吾批評水滸伝に百回本（日本内閣文庫）と百二十回本（通行）とあり、尚別に巴里図書館に三十回本があるというがそれは知らず、同一人が二通りの本に、而も殆ど違ふ言葉で批評する筈もなく、何か之は疑しい。百二十回本は、李の門弟楊定見が、李の批評した忠義水滸伝を袁無涯にわたして刊行させたということになつてゐる。（楊定見小引）。楊定見が李卓吾と親しかつたことは李氏焚書などによつても知られるけれども、この小引は疑へば疑へるので、之を刊行した袁無涯という人（袁小修が袁無涯から李卓吾評点水滸伝を贈られたことが遊居柿録に載つてゐることを、何心の水滸研究が注意してゐる）が、李氏評の百回本を増して百二十回とし、その批語を偽作して刊行したとも考へられる。（胡適はそも〳〵水滸伝の李氏の評なるものがすべて書賈の偽作かと疑つてゐるが）。

又李氏焚書の中に、忠義水滸伝序というものがあり、（之も焚書が李氏の死後に輯められたものだから信用出来ぬ、と胡適は云つてゐるのだが——水滸伝新考。万有文庫本百二十回的水滸——日知録の李贄の条に引いてある神宗実録万歴三十年二月乙卯礼科給事中張問達が李卓吾を弾劾した上疏の文に、「近又刻蔵書及焚書卓吾大徳等書流行海内惑乱人心云々」のあるのを見ると、焚書は李卓吾の生存中に刊行されたものと見る可く、その点胡適の失考かと思う）、李卓吾が水滸伝に深い関心と興味とをもつてゐたことは明らかである。

大体李卓吾（万歴三十年卒七十六一六〇二）という学者は、明の王陽明のあと、所謂王学左派といはれる王龍溪・羅近溪の系統に出た人であり、王龍溪は心の本体としての良知の自然な流露を尊とんで、すべて作為的なものを排斥したし、羅近溪は又赤子の心ということを説いた人であるが、之が更に李卓吾となると、どこ迄も人間の心の自然を生かすこと、煩悩即菩提、人間の性情のまゝに任ずる所謂率性ということを称へて、穿衣吃飯、人間の衣食の欲こそ性情の自然であり、このほかに人倫を求め、教条を立てゝ民を治めようとする儒教の行き方を謬れりとした。そして人皆生知を具備する上は、人皆平等であり、人皆聖であり、仏である。この点かの王陽明の良知の説を押してゆけば勢ひさうなるものであらうが、已に王心斎の弟子には樵夫や陶匠があつたというやうに、李卓吾の門弟にも又さま〴〵の人物が居つたと思はれるし、彼の講席に女人がまじつてゐたことも——それも彼が非難を受けた一つであつたが——同じく人間の平等の観念から出てゐるのである。（答以女人学道為見短書）生れたまゝの素朴なるもの、それがすぐに聖である。本能的な要素をそのまゝ性情の自然として肯定し、後天的な聞見道理を排斥した。世間の礼教に束縛されず、自己の本心の要求に忠実に生きることこそ真実の路と考へたのである。こゝに彼の童心説が生れる。

童心とは純真なる、最初一念の本心である。この童心が外から

入つてくる道理聞見のために障げられると、言語も心のまことから出ず、政事にも根底なく、文章は更に人を動かさぬ。凡そ六経語孟は史官褒祟の詞か、臣子賛美の辞であり、でなければ愚かな弟子たちが、師説をうろおぼえで後から書いたものであり、よしそれが聖人の言葉のまゝであつたとしても、それは聖人が愚かな弟子たちの一人々々の欠点に応じて投薬せる、いはゞ対症療法なので、決して万世不変の至論ではない云々。彼は儒教の礼教に束縛されて人間真実の心の要求を殺すことを憎み、抑圧された人間性を解放しようとしたのである。こうした所から、彼は文学に於ても、むしろ従来賤しめられてゐた通俗小説や戯曲、ことに西廂記や水滸伝というものを、この童心の文学であるとし、人情自然の発露を描いたものとして、実に古今の至文とさへ激賞したのであつた。

彼のこうした思想の背景に、当時庶民階級の勃興、庶民文化の向上ということがあるのを感ぜずにゐられない。彼の男女平等の考へ方も、庶民生活に於ける女性の実力と切りはなしては考へられぬ。人間としての士庶の差別を認めず、人間の衣食の欲求を先づ満足させる政治、人間の自然の要求を生かして、すべての人を生かす政治（答鄭石陽。論政篇）を主張したのである。地方の役人にすぎなかつた彼は、中央の腐敗堕落せる上層に対して烈しい憤りを抱いた。その人々が、以て支へとする所の儒教の礼教を手ひどく批判した。彼は僧侶のやうに剃髪して、士庶男女のいりまじる講席で、似而非道学者を嘲り、礼教の虚偽を排撃したのであつた。遂に彼は聖教をあなどり、妖言を以て民を惑はすものとして、通州の獄に囚はれ、その中で或る日剃刀を以て自殺した。

さうした彼が水滸伝をよみ、かの豪傑たちの素朴率直な行為を、童心のあらはれとして之に共鳴し、時の朝廷の奸臣共との対立に於て、彼ら梁山泊の英雄の行為を認めたとすれば、かの忠義水滸伝序というものは、たとひ彼の作たることを疑つても、その心持は李卓吾と甚しく相背くことは無いと思はれる。ことに彼は、性情の自然に出るものなら、天を欺き人を罔ふる徒に出逢つては之を手刃し、直ちにその首を取らうとすることもありうると認めてゐたやうだから（答友の語、焚書）、水滸の豪傑の暴怒のふるまひも亦認めて憚らない筈である。

この所謂忠義水滸伝序によれば曰く、

水滸伝は発憤の書なり。宋朝衰へ、上下尊卑顚倒し、大賢下にあり、不肖上に在り、はては夷狄が上に居り、中原が下に処るに至つた。当時の君相はさながら燕鵲が堂に在る如く、幣を納めて臣と称し、甘んじて膝を犬羊に屈するのみであつた。施、羅二公は、身は元に生れたが心は宋にあり、二帝の北狩（北宋末、徽宗欽宗が金のために北につれてゆかれたこと）を憤つては、大いに遼を破るを称し、南渡の苟安（南宋が一時の安を貪つたこと）を憤つては、方臘を滅すを称してその憤りを洩らした。（水滸後半、宋江ら招安されて、遼や方臘を討つて功を建てるところ）。その憤りを洩らしたのは誰か。則ち前の水滸に聚つた強人たちであつて、之が忠義でなくて何であらう。宋江は、身は水滸に在り乍ら心は朝廷に在り、一意招安を希望し、専ら報国を図つた。而もその悲惨な最後に終るを免れなかつた所、これその忠義なる所以。実に忠義が朝廷に無くして水滸に在つたのである。今もし為政者が一度び之を読んで考へる

なら、忠義は水滸に在らずして、朝廷に在るに至るであらう。梁山泊の一百八人こそ、国に対し、君に対し、ほんとうの忠義の士であつたのだとして、その忠義の報いられぬ末路の悲劇はいよ〳〵彼らの忠義を表すものとしたのである。

水滸に忠義の二字を加へたのは、百二十回本忠義水滸伝発凡によれば李卓吾だということになるのだが、已に本書の中にも、第一回洪大尉が石碣を開くところに「……これ宋朝必ず忠を顯はし云々」とあるに始まつて、後に梁山泊の聚義庁を忠義堂と改めるなど、そのほか忠義ということばは本書中に見えるので、この序によつて作り出されたものではない。むしろ忠義とは北宋末年、金の侵略に対して晉南太行山中にゲリラ戦をした人々が忠義社を名乗つた、その名残かと見る江樹峯（水滸的好処）の説が当つてゐるかもしれぬ。水滸説話の源が太行山に関係あることは聶紺弩（水滸是怎様写的）が指摘してゐるところである。たゞ李序は特にその忠義ということを強調して、筆者の当時の政府の失政に対する不満を洩らしたものであらう。

こうした百八人を忠義の士とする見方に真向から反対したのは明末の金聖嘆であつた。

金聖嘆（一六一六卒 順治十八年）は水滸伝を、荘子、楚辞、史記、杜詩と並べて、第五才子書と称し、之に批語を下した。その方法は、彼に先立つ鍾惺、譚元春の詩帰の評語に倣ひ、文中に批語を挿入して、作者の性霊を字句の間に捕へようとした。本来かうした批評の方法は八股文批語の法によつたものと言はれるが、金の評たるや、実に彼一流の奇警の語を駆使し、その文学観賞力の限りを示した。

当時その怪癖は魔に魅入られてゐるとさへ噂されたという金聖嘆の仕事であるから、決して尋常一様な批評ではない。彼は先づ七十回の古本を得たりと称して、水滸七十一回以後を削つてしまつた。原文を随所改めた。彼が一度手を加へると、文章は急に活気を帯びた。それをそしらぬ顔で原文の佳なる所だと賞讃して見せた。彼の批語は読者の気付かぬ所を衝いて、今更のやうに水滸の面白さを感じさせた。だから彼の批評した水滸伝は、他の本を圧して、世間に大流行して、その後三百年近い間というもの、水滸伝といえば、一般にこの金聖嘆本以外に読まれなくなつた程である。七十一回以後の水滸（宋江ら招安以後）は確かにその前の部分（豪傑が次第に梁山泊に聚つて来る部分）に比べて精彩を欠く。之を悪札として切り捨てた金聖嘆の文学眼は賞められていゝが、彼が此の後半を、古本に托して截り去つたのには、彼としてはもつと理由があつた。

彼は梁山泊の百八人を、正しく江湖の強盗であつて、忠義の士などではあり得ないとした。「王者之を誅せば、千人も快しとし、万人も快しとする盗賊である。然るに村学究は之を読んで、宋江の甘言にのせられて、彼らを本当に忠義だと思つたのだ。こんな間違つたことはない。」というので、従来行はれた忠義水滸伝の忠義の二字を削つてしまつた。同時に先にあげた第一回の「忠良云々」の原文も除去した。又たとへば七十回、宋江が梁山泊で衆に告げる段で、「惟願朝廷早降恩光、赦免逆天大罪、衆当竭力捐軀、尽忠報国、死而後已」とある下に、（仮話）と批語を入れた。また同じく七十回に聚義庁を忠義堂と改める段はわざと残した。何故かといえば、彼らは盗賊であるのに特に忠義を偽つて称

してゐることを表はす為であつた。故に批語に曰く、「甚しきに至つては忠義の二字を以てその端に冠す。抑も何ぞそれ上を犯し乱を作すを好むの、かくの如く甚しきに至れるや。」。彼に言はせると、そも〳〵水滸という題名からして、作者施耐庵が彼ら百八人を憎んで、之を中国に在るを許さず、はるかな水涯に遠ざけたのだと云う。このやうな盗賊を、朝廷が招安して、彼らに功を建てさせる、ということは、まるで朝廷の威信を傷け、賊をして益々猖獗ならしめ、遂に天下を治める術がなくなると云つた。乃で彼は後半の招安以後を打ち切り、七十一回に梁山泊の英雄が、夢に一同斬に処せられると見る所を書き加へて終結とした。かくて忠義の士、一変して憎む可き盗賊となり了つた。

それは何故であるか。胡適は之について、（水滸伝考証。民国六年）金聖嘆がこの批評を書いたのは崇禎十四年で、明朝の滅亡直前に当り、恰も流賊天下に遍き時代であり、張献忠、李自成らの強盗が全国にはびこり、社稷を危うしてゐる時であつたから、彼はこういう強盗を決して賞讃すべきでなく、まさに口誅筆伐すべきものとした。文学家金聖嘆が春秋筆法家金聖嘆に誤まられたのだといつてゐる。思うに李自成らの起義の真相と歴史的意義が正当に評価されるに至つたのは最近のことで、（郭沫若甲申三百年祭に詳し）、その点は胡適としても未だ考へ至らぬところであつたと思う。

所が金聖嘆については色んな見方もあるもので、かつて昭和初年、辛島驍氏は（京城大学法文論考）金聖嘆を以て虐げられたる庶民の味方であるときめた。曰く、金聖嘆は梁山泊の豪傑を盗賊だとしたが、それでは何が彼らをそうさせたか。そこが作者のねらひであると金聖嘆は見たのだ。正しきが故に圧迫され、世を狭められて、みす〳〵梁山泊に落ちてゆかざるを得なかつた、そこに画かれた社会の矛盾不条理を彼は憤り、百八人の運命に熱い涙を流した。されば曰く、「必ず已むを得ずして尽く水泊に入るは是れ誰の過ぞや」（第二回批語）と。

之はやゝ感傷的な観方であつたが、近頃宋雲彬氏（一九五三、三、文芸月報、談水滸伝――何満子著論金聖嘆評改水滸伝引）は、かの胡適の説に反対して、金聖嘆は封建社会の中にあつて、少くともあまり本分を守る人ではなかつた。その性格中には一点叛逆的なものがあつたのだ。彼があんなに力を入れて水滸を批評した、そのことが即ち彼が梁山泊の好漢に同情した証拠である。宋江を仁義の仮面をかぶつた悪人としてゐるのは、むしろ金聖嘆が歴史をよく見てゐるからで、中国歴代の農民運動を仮りて所謂帝業を成した人々は、一人として仁義の面を仮らぬはなかつたから云々、といつてゐる。

ところが近頃又何満子の論金聖嘆評改水滸伝（一九五四、三月）という書物を読むと、之はまた金聖嘆を完膚なきまでにやつつけて、彼は完全に封建統治階級の代言人であり、反動であり、水滸の精神とは正反対の思想の持主であつたと論じ、このところ辛島氏の意見とはまるで反対な結果となる。

魯迅はかつて（南腔北調集。談金聖嘆）金聖嘆の最後は清朝の例のはげしい筆禍事件の犠牲となつたのではなく、彼が官紳から悪者と認められてゐたからであつたが、実はそれは寃枉だつた。彼の思想はむしろ官紳に近い。彼は流賊も、皇帝も、人民からしぼり上げる点では同じであることに気が付かなかつた、という意

味のことを言つてゐるが、何満子の説はこの魯迅のことばに示唆を受けてゐるかも知れない。

何満子によれば、金聖嘆という男は、自ら統治階級の地位を望み乍ら、それにありつけず、乃で現在の統治階級に対する不平家となつた。つまり己の才を以て世に容れられぬを憤る不平家だつたわけで、この点、屈原や杜甫が人民を憂へた気持とは全くちがふ。彼は本質的には封建統治階級の道統思想の保護者である。もとより彼はたゞ経書を暗誦して、あり来たりの教条で人を訓へようとする陋儒ではなかつたが、彼は封建的な君臣父子の道を永久不変のものとし、盗賊である宋江らが招安されて方臘征伐に功を建てるのは、朝廷の威信を傷けるものとして反対した。

彼は百八人の起義の意味を知らず、たゞ彼らを憎んでも余りあるものとした故に、彼らが招安以後、外国の侵入を討ちはらつて功を建てたことを削り去つたのは、全く金聖嘆が中国人民の民族思想を全然理解してゐなかつた証拠である。おまけに彼は芸術をどこ迄も少数選民のものとし、広大なる人民に汚されるを許さぬといひ、批評も観賞もすべて大衆と隔離した場に於てしたものである、云々。

今これらの説を考へ併せると、辛島氏は徒らに感傷に堕し、何氏は余りに現在の立場に立つて三百年前の読書人の思想を責めるに急である。ほめるにしても、責めるにしても、あまりに金聖嘆の文章を正面から受けとりすぎてゐるのではないか。金聖嘆の文学批評は階級闘争をとなへるのでも無ければ、封建思想を擁護しようとするのでもない。その点を今少し考へてみよう。

彼の批語の中、一番大きい矛盾は、その水滸伝読法に、「大凡読書は先づ作者がどんな心持で書いたかを知らねばならぬ。史記の如きは司馬遷が胸中の宿怨を発揮して書いたものだが、水滸伝はさに非ず、施耐庵にはもと〳〵発揮す可き何らの宿怨もない。只飽煖無事、つれ〴〵なるまゝに紙を伸べ筆を弄し、題目を尋ねて、已が文才を書きあらはしたものである。故にその是非皆聖人に謬らず」と云つてゐる。之は恐らく、かの李卓吾序が、時の政治に憤激して、水滸の人々を以て忠義の士とし、水滸の評に托して已が憤りを発揮したと見られるに対し、ことさら、水滸にそのやうな意味無きことを主張しようとしたものである。

ところが第一回の批語には、

「此書をつくりし者の胸中、吾その何等の寃苦ありしやを知らず」

といひ、又第二回に

「必ず已むを得ずして、尽く水泊に入るは、これ誰の過ぞや」

といつてゐるのは、正しく矛盾の言である。同時にこれが一部で彼を被圧迫階級の同情者であり、味方があるときめて了ふところであるが、之はやはり何満子の云ふやうに、彼自身が当路に容れられぬ不平を托したものと見るべきであらう。

凡そ人が忠義だと云へば、いや賊だと云う。賊だと云へば、いやそれは誰がさうさせたのだという。首領の宋江を傑いといへば、いや下劣極まる人間だという。粗暴だといへば、いや「天真爛漫」（水滸伝読法中の語）を見るべきだという。その逆説じみたところに彼の批語の面白さがあり、彼の文章の魅力があると言えるのだが、そこには又その由つて来るところがある。

彼はもとより明末李自成らの蜂起を見て、その農民運動として

の意義を思うことなく、先づ彼らが世の秩序を乱すことを懼れたのは、歴史的限界の中に於ける彼の思想として無理からぬことであり、同じく水滸の百八人をも、世に許しがたき存在と考へたのであらう。而も当世に意を得ぬ彼が、当路者を憎み、権勢者に反感を抱き、当時各地の農民一揆が、悪徳の役人を殺傷するのを聞いて、むしろ心中痛快を覚えるところがあつたかも知れない。金聖嘆の反骨は、盗を許しがたしとしつゝも、尙豪傑たちの直接行動に心中快哉を叫びたかつたのではないだらうか。

故に首領の宋江を盗賊の首領として筆誅を加へつゝ、その余の百八人に対しては、

「水滸伝が独り宋江をのみにくむは、亦是れその渠魁を殲すの意なり。その他の者は之を饒恕せり。」

といつてゐる。なぜ宋江以外を許すというのか。宋江はその性格が慎重で、計画的で、常に身をへりくだつて衆望をあつめ、朝廷から招かれる日を心に待つてゐるという人間で、金聖嘆は之を偽善者と見た。このやうな偽善者にしたのは、水滸の作者が特に賊の首領として宋江を憎んだからであるという。（尤もさういう箇所が特に金聖嘆の加筆による場合が多い。彼は宋江のもつ性格を、わざと筆を加へて誇張した）。ところがそれ以外の、武松、李逵、魯智深、林冲といつた人物は、何れも直情逕行で、各々特色ある性格を自由に発揮してゐる。かの李卓吾が童心を尙ぶといつた、性情の純粋な発露を美しとする考は、明末思潮の著しい一傾向として、金聖嘆にも明らかに伝つてゐる。梁山泊の百八人は、何という「天真爛漫」な人々であらう。李逵、武松はその観点からすれば上々の人物である。神に近い。魯智深亦上々だ。彼らは盗賊であり、忠義の何たるかは知らぬ。しかしその盗賊の世界には自由が無からうか。彼らは各々その個性を憚るところ無く発揮してゐる。こゝが嬉しいところだ。その山野の自由児が、朝廷の招安を受けて降参しては何にもならぬ、ということにもなるであらう。

本来、彼の水滸の批語にも、又後の西廂記の評にも、その他彼の文章に、一様にその底を流れてゐるのは、荘子流の虚無思想である。或は荘子の逆説や、仏典の玄妙な語を弄ぶのが趣味になつてゐるといつた方がいゝかも知れぬ。彼は水滸や西廂を評することを、又人生の一消遣法としてゐるのだ。彼は己れの才を発揮して、讀者の眼を眩惑させ、わが心を自由に働らかせて憚るなき、痛快な場を文学批評の上に求めたのだ。水滸の批評は彼の反骨の致すところである。その反骨は最後には彼を刑死させたのだが。反骨とは何。権威に対し、礼教に対し、平凡愚劣な人生に対し、破壊的な気持を抑へかねることである。それは又何物にも拘束されることなく自己を生かし、自我を押し立てようとする心に通ずるものだ。彼は水滸に於て、何よりも先づそこに描かれてゐる人物の強烈な個性の奔放なる発揮に共鳴したのである。彼は性格という語を好んで用ひた。彼にとつて何より心を引かれたのは、盗賊ではあるが、天真樸実なる彼ら個々の性格の描写であつた。

「施耐庵は心の暇にまかせて錦繡の才をのべ、実に各人各様の性格を写し出した。かうした創造は、まことに天地の化に参するものであつた」——

という意味を水滸伝読法の中に書いてゐる。こゝで注意したいこ

とは、先の李卓吾にせよ、又この金聖嘆にせよ、水滸伝の物語は宋以来、民間に於て語りつたへられ、又何百年かの間に多くの人の手を経て次第に大きなものになつて来た、いはば民間集体創作であるということに全然思ひ至らなかつたことである。彼ら李卓吾にしても、袁中郎にしても（彼は水滸を金瓶梅と共に賞讃した）、金聖嘆にしても、皆、童心、性霊、天真の発揮をよろこんだので、個性の尊重、人間性の解放という、当時思想界の流れに沿つたものがやはりそこにもあつたのである。

因みに我が滝沢馬琴は、新編水滸画伝を著すに当つて、この水滸を勧善懲悪の書として扱はうとし、従つて賊である彼らから忠義の二字を削り去り、同時に金聖嘆とちがつて、七十回後の物語をのこして、彼らの悲惨な末路に因果応報を示さうとしたのである。而も水滸が勧懲の趣旨明かならざるを遺憾とし、已が八犬伝に於て之を明らかにしようとしたものである。馬琴には遂に童心云々の思想は理解されなかつたであらうと思はれる。

水滸伝が民間説話から次第に生長して、画家や、講釈師や、芝居の作者や、多くの人々の手を経て、遂にある天才作家によつてまとめられ、その後も更にいろ〳〵な人の手を加へられたことは、今日ではもう常識となつてゐる。それには胡適の考証の結果（水滸伝考証、一九二〇。水滸伝後考一九二一。水滸伝新考一九二九、百二十回本序）が大きな貢献をした。むろんその中には今日その誤謬を指摘される所もあるが。更に魯迅の小説史略（一九二三）、鄭振鐸の水滸伝の演化（一九二九）にも重要な論証がある。最近（一九五三）聶紺弩が水滸はいかにして書かれたかという、水滸説話の形成発展を論じた詳しい論文があることは、最初にあげた通りである。

水滸が重要なる中国文学遺産として取り上げられるとき、この民衆の手によつて、長年月に亘つて作りあげられたという点が、非常に重視されるに至つたことは云うまでもない。

たゞこうした場合旧文学の批評が、とかく歴史的発展の現実を無視して、形式的に、機械的になり易い傾向が生ずるのは察しられる。初めにあげた黄裳の水滸劇を論じた文章（怎様看水滸故事。怎様処理水滸戯等数篇）は梁山泊の英雄の出身階級を調べ、その多くが軍官地主、土豪である故に、従つて彼らは動揺性が多いとか、吏卒出身者はもと〳〵統治階級の道具だから、こんな連中は革命事業に対して多くの興味は無いとか、水滸伝中自分の愛するのは武松でも李逵でもない、阮家兄弟だ、それは彼らが中世紀の漁猟労働者の中心人物であるから、といつたやうな批評をしてゐる。之に対して、戴不凡の「水滸戯及其他」を評すという文章は、（文芸報一九五三、一七号）それが極端に機械的な考へ方であることを指摘し、宋江にしても、林冲にしても、彼らはすべて自分の出身階級にそむいて梁山泊に上り、農民階級の利益のためにたゝかつたことこそ大切ではないかと論じてゐる。之についても更に言ふべきことはあるであらうが。

前記の一九五三年冬の講習会の模様は、路工の報告（文芸報一九五四、第三号）によつて知られるが、その最初に当つて多くの人は、こうした古典文学に描かれた封建社会は事実もう存在しないのだから、さうした社会の遺物はもはや意味が無いとし、又何故に水滸を学習するのか、もつと好い手本が現在のソ連文学にあ

るだらうとか、中国の古典より、いつそ外国の古典を讀んだ方がいゝとか、いふ声があつた。之について、実は水滸伝を讀んだことのない者もあり、又水滸伝を讀んで、原始的な、粗浅なものだと考へた者もあり、甚しきに至つては自己の民族文学に対して、自卑の感情を持つものがあつた、と云つてゐる。その根本問題は従来古典文学作品に触れることが少なかつたからで、この際原則的な指導と具体的な幇助が必要とされた。

乃で先づ講習会の始に当つて鄭振鐸と聶紺弩とが講演を行つたことは最初にのべたとほりだが、学習の要点として、水滸伝の出来た時代背景、及当時の中国封建社会の主要矛盾の反映。思想上芸術上より見たる水滸のリアリズムの到達点。水滸が中国歴史上に於ける社会影響及文学上の影響。水滸の学習が我等に対する実際意義。そして我らが水滸というこの古典文学に対すべき態度如何というやうな諸問題が提起されたのである。

讀書討論が始まつていろ〳〵中には突飛な意見も出たやうであるが、最後にほ或る到達点に一致し、結論をまとめて馮雪峯が報告を行つたことは已に述べたとほりで、之によつて皆々非常な満足を得たとされてゐる。

馮氏の報告は大体上にあげた問題の提出に答へたもので、十四項目に分たれてゐるが、その中、重要な点をこゝに略述すると、先づ水滸の主題の中心意義及その芸術上の菁華は前七十回の中にある。（この講習会で、人民文学社版の七十一回本がテキストとして使用されたのだらうと思う）というと、その点金聖嘆と全く同じやうだが、金聖嘆と違ふのは、こゝに描かれた農民起義に対する態度である。金聖嘆は農民起義に反対したから、宋江らが後に朝廷に招かれることを願はず、むしろ朝廷から誅戮されることを望み、七十一回を書き足して、盧俊義の夢に托して彼らに刑戮を加へた。我等は此書を北宋末の一農民起義を主題とするものと認め、且つその中心意義が前七十回中にこもつてゐることを認めるのであつて、その後の部分も、金聖嘆のやうに切り棄てようというのではない。

次にこの作品の真実性如何、又作者は有意識的に農民起義を描かうとしたかどうかゞ問題になつたが、凡そ作品の真実性ということは、当時の社会還境、歴史発展の具体的情況が、芸術形象にいかに反映されてゐるかに在る。この書物は北宋末年の農民起義の根本精神をとらへ、当時の社会生活のリアルな相を描き出して余すところが無い。その高い真実性は、この書が封建社会中にあつて、大胆に彼らの階級闘争を描写し、北宋末、又はそれに接近せる時代の社会還境に於ける農民起義の英雄たちの典型を創造して、中国人民の革命と正義のたゝかひの精神を反映した点にある。

梁山泊はいはゞ初歩的な農民政権であり、地主階級（統治階級）の残酷な剝削と圧迫とに対するたゝかひを実行し、所謂天に替つて道を行ふもので、その道とは実に封建統治階級から見れば大逆不道とされる革命の道であつた。英雄たちは農民出身者でなくても、常に農民群衆と一つになつて行動した。彼ら英雄を農民群衆から引き離して考へるのは誤つてゐる。

文芸作品の人物は、すべて典型化の方法を必要とする。その人物が凡人であつても、英雄であつても、きつと一種の社会勢力と之に属する多数者の特点を反映せねばならぬ。水滸伝は百八人

中特に主だつた者を描写してゐるが、彼らはたとひ農民出身でなくても、皆人民性を十分具へた人物である。その従事した運動は、その出身如何に係らず、農民革命に属してゐるのである。それは又とりもなほさず、歴史の真実を反映してゐるとも云へよう。中国の歴史上大小数百の農民起義に、農民階級以外の人が加はらなかつた事が無い。地主、貴族、官吏、そして野心家が参加するのが常であり、それは長所もあり欠点もあつた。そのため勢力を増し、知識を増し、実際上の指導者を得たのはいゝが、彼らは必ず又農民を利用して彼ら自身の目的を果さうとしたのであつた。中国古来の農民起義の失敗は、農民の力が彼らに利用され、彼らが皇帝たらむとする資本にされて了つた故である。之が歴史上中国農民起義の実際であつた。

水滸百八人の英雄は、出身から云へば農民出身者と下層社会出身者とがまづ半分であらう。彼らの身上には、人民群衆の特徴が最も鮮かに示されてゐる。之らこそ農民群衆、下層人民群衆の典型だ。李逵の性格など、その最も成功せる芸術的形象であり、人民の最も好む人物である。

しかし、その他の人々も、たとへば宋江は一小官吏であり、小地主だが、彼があんなに一同の心服を得て首領となつたのは、やはり正義の為にたゝかひ、富を刧して貧を救ひ、かの武松、魯智深、林冲等と共にやはり人民の愛する人物だつたのだ。盧俊義の如き大地主も亦梁山泊に参加し、農民から愛されて、所謂人民性を充分具へてゐたと見ねばならぬ。中国古典の中で、水滸伝のやうに多くの人民の英雄形象を含有してゐるものはない。之ら英雄の名は広く中国子女に馴染み深いものであり、恐らく将来も中国の語言の中から消え去ることはあるまい。

改めて言へば水滸伝は農民起義を主題とし、一系列の英雄形象を描き、農民階級と地主階級との間の矛盾と闘争とを展開するものである。

然るに旧い伝統的な見方は之と違ふ。宋江らは本来忠臣義士で、只濫官汚吏に容れられず、已むを得ず落草した。しかし宋江は身は梁山泊に在り、心は朝廷に在り、常に皇帝が左右の奸臣の蒙蔽を除いて、早く詔を降して招安し、国家の為に力を出すことが出来るやうに願つた。招安の後、却つて重く用ひられることもなく、而も二心無く朝廷の為に大功を建て、最後に宋江は朝廷の奸臣の為に陥れられ、薬酒を飲まされて死ぬ。その死の間際にも、粗暴な李逵が謀叛を起すのを懼れて、罪の無い李逵に毒酒をのませて、自分と一緒に死なせる、実に可歌可泣、忠臣義士といふ可きではないか、ということになるが、之は根本的に誤つてゐる。

七十回後、彼らが朝廷の招きを受けて帰順したことは正に農民起義の失敗の現象である。農民群衆は、皇帝や統治階級に対して、いつも或る種の幻想を持つてゐたのだ。すべてよき皇帝と忠臣と好き官吏とが有つて、政治をよくしてくれることを希望してゐる。この幻想に引かされて欺かれて妥協し、朝廷の招安を喜んで受けるという農民階級の根本の弱点ときりはなせぬ。之亦明かな歴史の真実である。

（この点覇紺弩は論水滸的思想性和芸術性是逐漸提高的――一九五四、五、人民文学――で、水滸の悲劇は農民起義の失敗で、彼らが投降して、昨日の敵、統治者の為に鷹犬となり、昨日の

同類の、他の起義—方臘——を討伐するという、このあたりは確かに前半に比して思想性が軟弱であり、幾百年前の作者としてはこうならざるを得なかつたのだらうが、しかも宋江らが投降の後、暗澹たる境遇に陥ることは、読者をして、投降は決して好き結果を来たさず、封建統治者には決して心を許せぬことを訓へてゐる、云々といつてゐる。)

云ふ迄もなく、作者は旧歴史観をもち、歴史唯物主義の観点に立つことなどは出来なかつた。階級闘争などゝいう観点から農民起義を見ることは出来なかつたに相違ない。たゞ作者は農民に同情し、農民起義を肯定し、農民と正義との側に立つたことは明かである。作者は農民起義を今日の我々のやうに見る事は出来なかつたけれども、彼は彼の観察した事実に照らして描いたので、農民運動の真のすがたがそこに示し出されたのだ。時代条件の制限はあり乍ら、その写実主義は、この農民起義の根本精神をとらへ得たのである。

かくの如く豊富なる人民性を具へてゐる作品は、之を貴い遺産として、我らの研究、分析、批判を経て、我らが創造する社会主義社会の上層建築の、必要なる材料の一つとすべく、重要なことは、それが我らの創造する新文学と文化とに対し、缺く可からざる営養と、反省の材料となる大きな作用を為すことである。又梁山泊起義の精神は、中国過去の人民が、我らに残した最も貴い精神財産であり、我々は今日の観点に立つて、之に分析と批判を加へ、その精神を継承し、発揮せねばならぬ。」以上。

路工も同じやうに結論して、

この度の学習に於て、

一、民族文学遺産学習の態度を樹立したこと。

多くの同志は深く祖国の文学遺産の豊富なること、民族の特色を具へた作品を創作するには、ぜひとも古典文学を学習せねばならぬことを感じた。過去に於て、自己の民族文学に対する自卑の感を持つてゐた同志も、この学習を経て、古典文学に対する充分な評価をもち、水滸の如き作品は、人民性と芸術性がすべて非常に高いことを承認し、これによつて更にいよ〳〵自己の民族を愛するやうになつた。

二、古典作品を学習する基本方法を学んだこと。

即ち基本上、粗暴に今日の尺度を以て要求すべきでなく、歴史的に、適当に評価を行ふべきを知つた。或人は之まで古典作品はすべて封建落後のものであると思つてゐたが、この度の学習を経て、いかにその滋養を吸収し、その伝統を接受するかを知つた、云々。

従つてこの学習が終始マルクス主義文芸評論の定石にそつて指導されてゐることはもはや云ふ迄もない。一九五三、一〇、四、中国文学工作者第二回代表大会で、「マルクス・レーニン主義の観点に立つて、中国と世界の文学遺産を批判的に受け入れること。古代と近世の中国文学を整理し研究して、中国文学の優れた伝統を発揮すること」が可決されてゐるのと合せ見るべきである。「進歩的文化遺産を批判的にうけつぎ、偉大な過去を有機的にわがものとすること」を言つたレーニンの言葉や、古典文学の意義をその透徹したリアリズムの勝利に帰せしめたエンゲルスのバルザックに対する評論の方法などが、そつくりそのまゝこゝで

繰り返される。古典文学の評価にリアリズムの到達点を見、又その芸術的価値を、生命力ある描写に見ようとするについて、中国の過去の文学に於ては、この水滸ほどその条件に適つたのは無かつたのである。

今中国の批評家たちは、いはゞ型にはまつた方法ではあるが、それによつてまた祖国文学遺産の偉大さを明かにし、祖国文化への誇りをもち、未来へ向つて進む人民の力の自信を得ようとする。

文芸の批評も云ふ迄もなく、各時代の環境や思潮から外れることはない。曾つては忠臣とされ、ついで又盗賊とされた者が、今日農民起義の英雄となり、かつて李卓吾にしても金聖嘆にしても、作品の価値をその中の個々の人物の個性の発揮に重きをおいたものが、今日は農民起義中の人物の典型として改めて考へられる。

同じ水滸に対する解釈がこうも違つて来てゐる間にも、広く一般大衆は、古来理屈なしにこの物語中の人物に拍手し、その行動に喝采してゐるのではないか。それはむろん此の作者の大衆の言葉による潑剌たる描写力によるとはいえ、そのもとは、いうまでもなく、元来この物語りが、数百年の永きに亘つて、民間に形成されつゞけて、その間民衆の感情が、民衆の物の考へ方が、民衆の願望が血肉となつてそこに生かされてゐるからに違ひない。かの封建武士の忠と孝を非人情に擬人化して、因果と勧懲のからくりにおどらせたわが国の八犬伝が已に今日の社会に於てはかへり見る人が殆ど無いのと反対に、水滸というものは全く比類の乏しい、最も中国民族的な文学であるといえようか。そして又中国の人民文学というものゝ進んでゆく可き一つの道が現にこゝに示されてゐるとも思はれる。

一九五四、一〇